

解答はすべて7枚目の解答用紙に記入しなさい。

問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（1）～（12）は段落番号を表します）

① 僕はNHKのBSで『COOL JAPAN』というテレビ番組の司会をしています。日本に来て時間のたっていない一般外国人をゲストに、日本のさまざまなものをCOOL（カッコいい）か、カッコよくないか、あれこれと話すバラエティー番組です。日本に来て、まだ1カ月たっていないというフランス人の出演者が、番組が始まる前に、興奮した顔で僕に話しかけてきました。

「先週、電車の中にバッグを忘れたんです。もう、悲しくて、その話を日本人の友人にしたら、すぐにJRに電話すると言うんです。そんなバカなと思ったら、僕のバッグは、置き忘れた網棚の場所に、そのままあったんです！」

② 彼は、目を大きく見開き、信じられないという顔をしました。

「フランスなら、間違いなくバッグはなくなっています。いえ、ヨーロッパなら、どこでもそうでしょう。持ち主が近くにいないと分ると、すぐに誰かが盗んでいくんです。日本人はなんてマナーがいいんでしょう！ ①これは奇跡です！」

③ 興奮した早口の英語を聞きながら（番組の共通言語は英語ですから）、僕はずっと微笑んでいました。日本人として、日本をほめられるのは、何にしても嬉しいものです。電車は東京の山手線のようにでした。ぐるぐると回り、大勢の乗客が乗り降りしている電車で、そのままバッグが残っていたことに、彼は本当に衝撃を受けたようでした。

④ しかし、2週間後、次のシニウロクの時、彼は困惑した顔で僕の前に現れました。

「今日、電車に乗っていたら、杖をついたお年寄りが乗ってきたんです。彼女は、プライオリティーシート（優先席）の前に立ったんだけど、座っている日本人は誰も彼女と席を替わろうとしないんです。みんな、下を向いたり、平気な顔で携帯電話をいじりながら座っているんです。フランスなら、いや、ヨーロッパならどの国でも、すぐに誰かが立って彼女を座らせてあげますよ。杖をついているお年寄りを立たせるなんて信じられない！ 昨日はね、階段を女性が乳母車を抱えて降りてたんです。でも、誰も手をもかさないんですよ。彼女は必死に、赤ん坊が乗った乳母車を一人で下ろしてるんです。いったい、この国のマナーはどうなっているんですか！」

⑤ 彼は、本当に理解できないという顔をしました。2週間前、この国のマナーをゼツサンしただけに、本当に戸惑っているようでした。日本人だって席は譲るよ、とあなたは思うでしょうか？ 欧米に旅行したり、住んだりした人は、欧米の人たちが、素早く席を譲ったり、乳母車の手助けを自然にすることに驚いた経験が一度や二度はあると思います。イギリスの地下鉄に乗っている時、※1モヒカンヘアーのパンクファッションの若者が、老人にサラリと席を譲った風景は衝撃でした。思わず、「お前の※2反体制のポリシーはどうなるんだ？」と、耳にじやりとピアスをナラべ、※3鉾が打たれた革ジャンを着ている若者に聞きたくなりました。そんなパンク野郎が、照れるわけでもなく、ふてくされるわけでもなく、じつに自然に席を立つのです。それは、※4フシギな光景でした。

⑥ それ以来、僕は、日本と海外の席を譲る割合のようなものに⑤妙に敏感になりました。欧米の平均は、80%を超えていると思います。目の前に老人が立てば、8割以上の確率で、欧米人は席を譲ります。日本は、5割を切っていると思います。老人が目の前に立っていても、半分以上の場合、日本人は席を譲りません。①、階段を一人で乳母車を抱えて降りていく母親に「持ちましようか？」と声をかけて助ける日本人の割合は、1割以下だと思っています。欧米だと、これも8割以上の人が、自然に手をかします。

⑦ 僕たちは、マナーの悪い国に住んでいるのでしょうか？ そんなことはないと思います。現に、フランス人の彼は、2週間前はぜんぜんしていたのです。そうです。彼の話に戻ります。彼は、困惑していたのです。

「日本人はマナーがいいのか悪いのか、さっぱり分かりません！」

⑧ あなたなら、なんと答えますか？ Ⅱ『COOL JAPAN』という番組は、こういう日本人と外国人の意識の違いを見つけ、考え、楽しむ内容なのです。僕はしばらく考えました。そして、じつは、網棚に残ったバッグも、席を譲らない日本人も、同じ理由から

生まれているんじゃないかと、結論したのです。日本人は③同じ理由から、正反対のマナーだと思われる行動を取っているんじゃないか。それは、以下のようなエピソードに思い当たったからです。

⑨ 電車で、たまにおばさんたちの団体さんに遭遇します。おばさんのうち、すごく元気な人が、まず車内に飛び込み、座席を人数分、確保します。そして、後からやってくる人に「ほら、ここ！ 取ったわよ！」と叫びます。席を取ったおばさんは、他の乗客が席の近くに来て、当然のように無視して、自分の仲間を待ちます。仲間が遅れていて、他の人たちが戸惑った顔や、ちよつと怒った顔で空いている席を見ている、そんな視線をまったく気にしないかのように、自分が取った席は、自分の仲間たちの席だと確信しているのです。席を取ったおばさんにとって、席のそばに立っている学生だったり、親子連れだったりする人たちは、存在しないでしょう。存在しているのは、自分の仲間たちだけです。

⑩ そういう時、なかなかやって来ない仲間のためにぽつんと空いた席の前に僕は立ちながら、けれど、同じ日本人だからこそおばさんの心情がよく分かります。おばさんは、決して、マナーが悪いのではないのです。困っている仲間がいれば、きつと、親身になって相談に応じたりしているのでしょう。おばさんは、自分に関係のある世界と関係のない世界を、きっぱりと分けているだけです。それも、たぶん、無意識に。

⑪ 電車でのことをずっと考えていて、このおばさんの例を思い出しました。おばさんは、自分に関係のある世界では、親切でおせっかいな人のはずです。そして、自分とは関係のない世界に対しては、存在していないかのように関心がないのです。この、自分に関係のある世界のことを、「世間」と呼ぶのだと思います。そして、自分に関係のない世界のことを、「社会」と呼ぶのです。おばさんは、「世間」に関心があっても、「社会」には関心がないのです。そして、自分の「世間」に属している人のためには必死で走り、電車の席を確保す

るのです。Ⅲ、「社会」に属する人たちには、おばさんは、必死になにかをする必要は感じないのです。「すみませんね。ここは、あたしたちの席なんです」と微笑みながら断る人もいれば、まったく関心がないように無表情のまま無視する人もいます。

12 そう考えれば、網棚に残されたバッグと、優先席で席を立たない日本人は、同じ原理Ⅱルールで動いているということが分かります。ほとんどの日本人にとって、網棚に残されたバッグは、自分とは関係のない世界Ⅱ「社会」なのです。同じく、目の前に立っている杖をついた老女もまた、関係のない世界Ⅱ「社会」なのです。関係のない世界なので、存在しないと思って無視したのです。それが、網棚のバッグなら、「盗みのない奇跡の※4 モラル」になり、優先席の場合なら、「足の悪い人を立たせている最悪のマナー」になるのです。ちなみに、電車の中で、熱心にお化粧けしょうをする女性は、そこが「社会」で、自分には関係がないと思っているからできるのだと思います。もし、一人でも、会社の同僚どうりょうが乗り合わせて来たら、彼女は今まで通りには化粧は続けられないはずです。※ からです。

（講談社 鴻上尚史『「空気」と「世間」より。文章の一部を改めています

（注）※1 モヒカンヘアのパンクファッションⅡ 頭部中央の前から後ろへ一直線に髪を残し、両脇をそり落とした髪型で、とても目立つ格好。

※2 反体制のポリシーⅡ 現在の政治などを否定し、改革しようとする考え。

※3 鉾Ⅱ とがった金具。

※4 モラルⅡ 道徳。人が社会生活をする上で守るべきもの。

問一 Ⅱ部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 Ⅱ部 A「られ」、B「られる」と同じ意味で使われているものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 私の弟は何でも食べられる。 イ 彼の行く末が案じられる。 ウ 友人に住所をたずねられる。
エ 校長先生が話を始められる。 オ お客様が会社に来られる。

問三 ⅠⅢに入る最も適当な言葉を、次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア つまり イ まして ウ だから エ そもそも オ あるいは カ しかし キ たとえば

問四 Ⅱ部①「これは奇跡です」とありますが、何が奇跡のですか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問五 Ⅱ部②「妙に敏感になりました」とありますが、私はどうして敏感になったのですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人のマナーに関する二つの話から、イギリスでの自分の体験を思い出し、改めてヨーロッパのマナーの良さに感心したから。
イ 日本に来て間もない外国人が、日本人の自分以上に日本のマナーについて真剣しんけんに考えているのを知り、恥ずかしくなったから。
ウ 日本であれば、絶対に席を譲りそうもないような格好をした若者が、イギリスでは自らすすんで席を立つ姿が印象的だったから。
エ 日本人のマナーに戸惑っている彼に、どういう時に日本人は席を譲らないのかを説明する、司会者としての責任を感じたから。

問六 Ⅱ部③「同じ理由から正反対のマナーだと思われる行動をとっている」とありますが、どういう理由ですか。「Ⅱから」に続くように、本文から二十字以上二十五字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問七 Ⅱ※に入る内容として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「社会」がすべてだった空間に、「世間」が現れる。 イ 「社会」がしめる割合の大半が、「世間」に変化する。
ウ 「世間」が生まれる場所では、「社会」が混乱する。 エ 「世間」が急速に力を持った時に、「社会」が弱まる。

問八 本文からは次の一文がぬけています。この一文を戻すのに適当な場所を探し、その直後の一文の最初の五字をぬき出しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

それどころか、仲間思いのとても親切な人のはずです。

問九 本文を内容から大きく三つに分けると、二つ目のまとまりは何段落から何段落までですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 3 5 イ 4 7 ウ 5 9 エ 6 11

問十 次のア～オの文について、本文の内容と合っているものには○、まちがっているものには×をつけなさい。

ア 他人を気遣い、周りと協調することが日本人の美德だと言われているが、それは「世間」でしか見られない光景である。
イ 日本人からみれば、忘れ物は盗むが席は譲るという西洋人の行動も矛盾しているが、その原理は日本人と同じではない。
ウ 外国の人には、自分と世界の関係の変化によつて、とるべき行動や常識が変わるという日本人の事情は、理解しがたい。
エ 世界の中でも、日本人はマナーが良いと言われるが、その裏に真のマナーを理解しないという国民性が隠されている。
オ 弱い立場の人や困っている人を、自分に無関係だからと見過ごせない人が、日本人よりヨーロッパの国の人たちに多い。

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

父親の仕事で転校を繰り返してきた操は、内気な性格もあり、今までなかなか学校生活になじめなかった。しかし、樺島と出会って、初めて学校生活を楽しいと思うようになる。冬休みが終わり、迎えた始業式の日。唐津から樺島の具合が悪いと聞かされ、放課後、級友と連れだって見舞いに出かけた。

樺島の家は、賢い少年をハグクむにはうってつけの、閑静なたたずまいだった。玄関の※1軒灯を取りかこむように木彫りの飾りがあつて、そこにはふつくらとした鳩が二羽ならんでいた。

樺島は、庭に面した座敷で横になつていた。暮れから床にあつて、背中が綿布団になつたような気がする、などと皆を笑わせた。入院したところのある操は、その感覚がよみがえり、少ししか笑えなかった。※2スフレを持つてきた唐津が樺島といちばん親しい。調べてやる、と言つて病人の背中へ手を差しのべ、そのまま床から起きるのをささえた。手慣れて、呼吸のあつたしぐさだった。「とつくに、布団とくつついてるのかと思つたよ。」

①唐津は、樺島に綿入れをはおらせながら軽口を言つた。だが、表情はいくらか落ちつかなげだ。

「そうさ、くつついているのと変わらない。敷布みたいなものだろう、これ。」

樺島は身につけた紺色の寝巻を指して、

「毎日、毎日、こんなかつこうだ。」

うんざりした様子で息をついた。

「その色は似合うよ。」

唐津がなぐさめた。

「それは、どうも。きょうのはもシンチョウウしたんだ。皆が来るつて聞いたから。」

教室にいたときのような軽妙な調子が戻つて、樺島は笑つた。心なしかやせて見えたが、顔色はそれほど悪くない。勉強机も書棚もないその座敷は、樺島の部屋ではないらしい。家の人が、庭に面した明るい座敷へ床をとつたのだろう。そんなことを思いながら床の間に目をやった操は、きじ鳩を描いた掛け軸を見つけた。穏やかな丸い目をしている。樺島は操の視線に気づいて、いい絵だろうと言つた。

「兄が、古物市で見つけてきてくれたんだ。むろん複写だけど、この粗末な床の間にはじゅうぶんだ。」

「玄関にも鳩がいた。」

操は思いだしたように言つた。

「よく気がついたね。」

樺島は、暗黙の了解で事足りる友人に向ける笑みでこたえた。

「あれはね、ぼくが生まれたときに曾祖父が飾り職人を呼びつけてこしらえさせたんだ。厄よけらしい。だけど、ふつう厄払いにはもつと※3鬼気迫るものをわざと用いるだろう。鬼面を描いたものや、幽霊なんかね。鳩では、心もとない。だから、兄はもっと頼もしい厄よけを買つてこようと出かけたんだけれども、何のことはない、また鳩さ。」

②樺島は、病とはもう折り合いをつけたかのように明るく笑つた。

「だけど、兄が鳩の図を選んでくれてよかった。あのおとなしいようすを見ると気持ち平穏になる。安らぐんだよ。わかるだろう。」
皆はただうなずいて、黙りこんだ。ふいの静けさに、③樋をつたう雨音がしみた。軒端からは、とめどなくしずくが落ちている。窓に

光る雨垂れは、ガラスのなかからわいてくるように見えた。

「きょうは、雨だからあれはだめかな。聞こえないだろうね。」

気を取り直したように、明るい声で唐津が聞いた。

「いや、聞こえると思う。雨音とは区別ができるよ。」

樺島が応じた。

「それなら、試そうか。ぼくが傘を持つて庭へまわろう。」

唐津は慣れたようすで、案内も必要とせず、縁側づたいに出て玄関へ向かつた。しばらくして、傘をさした唐津が庭に姿を見せた。閑

じていた縁側のガラス戸をあけて、寒くないかと樺島に声をかけた。ふたりのさりげないやりとりは、操がこれまで培^{つちか}つてこなかったものの。尊^{たう}さを、垣^{かき}間^まみせてくれる。互いを敬うさまが、ひかえめにあらわれていた。

「平気だ。着こんでいるし、外の空気を吸うのもいい。それに、風邪^{かぜ}をひいているわけじゃないからね。」

黙^{もく}って相づちをうった唐津は、傘のかけで※をかんだ。樺島にとつてのいちばんの友が一瞬^{いつしん}見^みせた憂^{うれ}い顔に、操は不安をつのらせた。樺島の病は、重いかもしれない。窓をあけて、雨音はいつそう大きくなった。庭のくぼみに水たまりができ、幾重^{いくえ}にも水の輪が重なつた。

「聞き逃^{のが}すなよ。」

唐津はもとの明るい調子に戻り、庭にある小ぶりの※⁴手水鉢^{ちょうずばち}のそばへ傘をさしたまましがんだ。傷ものの茶碗^{ちやわん}が置いてあるのをして水をくみ、地面の小石がたまつてるところへこぼした。操には、はじめ何のことやらわからなかった。黒鉄の風鈴^{ふうりん}を鳴らしたような音が聞こえたが、一瞬だったので空耳^{くみみ}だろうと思つた。

「だめだね。よく響^{ひび}かない。雨で小石が湿^{しめ}つてゐるからだ。」

唐津はdベンカイするよう^{ベンカイ}に言つた。

「そんなはずはないよ。雨でも響く。優のよこしまな心が、なかの瓶^{びん}に知れてしまうのさ。」

樺島がからかう。それから、すぐに操のほうを向いて、仕掛けの説明をした。

「水琴窟^{みづきく}といってね、あそこへふせるように瓶を埋^{うめ}めてあつて、小石を敷いたところへ水をしたたらせると、中から音がするんだよ。ちよつと言いがたいんだけど、こわれたバネ仕掛けの玩具^{おもちゃ}を耳もとで振^ふつてみたい音さ。赤ん坊^{あかぼ}をあやす道具によくあるだろう、重りとオルゴールが仕掛けてあるような。」

「やけに上品なことを言うね。小判の降る音に似てるんだ。だから、縁起をかついで昔風の商家にこしらえてあることが多いんだよ。」唐津がひやかした。そのあいだに、ほかの少年たちも順番に試みて、首をかしげた。

「晴れた日なら、もつとよく響くのね。」

口々に言う。

「安堂君も試してごらんよ。」

操は、④樺島の口から名前を呼ばれる心地良さに酔^よいながら庭履^ばきを借りて、少年のひとりから傘を受けとつた。飛び石を渡り、手水鉢^{てすいばち}の縁^{ふち}においてある欠けた茶碗を手にした。小石はすっかり雨でぬれていて、煮豆^{にまめ}のように黒く光つた。操は注意深く水をくみ、少しづつしたたせさせた。

はじめは金属片が触^ふれあうときのかすかな響きに似て、そのうち、玉をころがすような音になった。※⁵ホーローの器に豆をいれて、くるくるまわしたときの音に似ている。それは、操が幼いときに氣にいつていた遊びである。

「ほら、人によるんだよ。安堂君は人柄^{ひとがら}で、静かな手つきだから、いい音が響くんのだ。」

樺島が教室でのときのように引き立ててくれた。

「偶然^{ぐうぜん}だよ。」

操は恐^{おそ}縮^{しゆく}した。

「もう一度、鳴らしてくれないか。」

樺島が望むなら、何度でも応じるつもりだった。しかし、二度目を終えたとき、小雨だった雨が本降りになり、樺島は皆に座敷へ戻るよう言つた。それをしおに、一同は引きあげることにした。

帰り道、操は唐津と二人になった。教室では、口も手脚^{てしあし}も盛^{さか}んに動かす活発な少年だが、樺島を見舞つた帰りは黙りがちだった。

「樺島君の体が悪いなんて、ちつとも知らなかった。」

操は、頼^{たの}りきりだった二学期のことをふりかえつて悔^くやむように言つた。

「いいんだよ。本人が隠^{かく}して過^かごしているんだから。ぼくたちにできるのは、氣のつかないふりをしてやることだ。」

しばらく沈黙^{ちんもく}がつづいて、唐津は別れ際に立ちどまった。

「背中が、以前よりずっと薄^{うす}かった。……泣きたくなるよね。」

短くもらした声が、いつまでも操の耳に残つた。

操はその後、ときおり樺島の家を訪ねた。だいたいが唐津と一緒^{いっしょ}だった。樺島はきまって操に水琴窟を鳴らしてほしいと望んだ。

「安堂君は名人なんだ。いつでも、音がよく響く。優はからつきした。」

からかわれて、唐津は顔をしかめるが、さして氣にするようすはない。樺島の家の人に代わつてお茶の支度^{しどく}をした。急須^{きゅうす}を持つ手も慣れたもので、ふだんの彼からは想像もつかないほどだ。剣道^{けんどう}できたえているからと、膝^{ひざ}をそろえて座るのも平気な顔だった。

樺島の家へ寄るときは、学校の帰りがけに唐津のほうで操に声をかけた。彼が剣道の稽古^{けいこ}があつて寄り道できないときは、操もまつすぐ家へ帰つた。⑤ひとりでは樺島の家へ寄りにくい。唐津への気兼^{きが}ねもあった。

けれども、はじめて樺島を見舞つたのと同様に小雨の降りしきる午後、操はひとりであの鳩^{※⁶}栖^すへ向かった。稽古に行く唐津から、

水琴窟の音を聞かせてやってくれと言伝ことづてがあつた。三時を過ぎたばかりというのに、天は暮れ合いのように暗く、樺島の家にも軒灯がともっていた。

「まあ、安堂さん、よくおいでくださいました。至剛みづたかは今寝ておりますけど、もう随分ずいぶんになりますから、じきに起きるころと思いますよ。あがつてお待ちくださいな。」

樺島の母は、少年の目もととよく似て穏やかな心根をあらわす瞳ひとみで微笑ほほえみ、はきはきとものを言えない操のふがいなさを和ならげてくれた。

「眠つてるのなら、じやまにならないように⑥少しだけ庭へ寄らしてもらつてもいいですか。」

「ええ、どうぞ。安堂さんの音の具合が、いちばんだそうね。」

言いながら、操を庭木戸のほうへ案内した。

「至剛は昔からあの音が気にいって、風邪などで床につくときは、きまってあその座敷へ寝かせてほしいと申しました。帰りにはまた声をかけてくださいね。お茶もさしあげずにお帰したら、至剛にしかれますから。」

樺島の母は操のかばんを預かると言い、飛び石は滑すべりやすいから気をつけて、と用心をうながした。操の前では、至剛と言う。本人のことは至剛さんと呼んでいた。そんなふうに律義なけじめをつけるこの家の気風が、賢く澄すみやかな少年をはぐくんだのだ。きれいに片づいた庭先や雨に凍こるかりこまれた※7灌木かんぼくは、家のたたずまいをいつそう閑静なものにした。

操は水琴窟のそばでしゃがみ、縁の欠けた茶碗に水をくんだ。手のひらにちようと納まる陶器とうきの肌合はだあいは、これから行う厳おごそかな儀式ぎしきと和している。操は静かに呼吸をしながら、水を落としてゆく。雨音に消えいりそうな響きにはじまり、やがて何かの拍子ひょうしにうまく水瓶をゆるがせたしずくは、玲々れいれいとした音をかなでる。あらかじめ、体の奥底おくそこにしまわれてあつたようなその音は、雨音すら届かないところで、静かに響いた。

座敷のガラス戸があいて、樺島の母が手招きをした。病びょう床しょうの少年は目をさましていて、操をそばへ呼んだ。操は庭からあがつて、樺島の枕まくらもとへ座つた。

「……いい音だった。」

「ごめん、起こしちゃつたみたいだ。」

「助かつたんだよ。……いやな夢を見てた。叫さけびたくなるくらい。そうしたら、あの音が聞こえて目をさました。叫さけばずにすんだよ。静かな気持ちになつた。」

叫さけぶ、などということばが樺島の口から出るとは思いもよらず、操はとまどつたように友人の、床に就いてからいつそう涼すずやかな目を見つめた。樺島は操の思いを見すかしたようににつけくわえた。

「両親も兄も、なるべく音を立てないように用心しているだろう。ひとりで寝ていると、静かに歩く足音や、炊事すいじをする音が、遠くのほうで聞こえているんだ。たいがいは気持ちが落ちついているんだけど、ときどきむしように叫さけびたくなる。両親や兄に気をつかせて申し訳ないという思いや、こうして動けないでいるふがいなさが込みあげてくるんだ。そういうときに、あの鳩の図をながめて、気持ちを静めるのさ。」

樺島は床の間の掛け軸を見つめた。e ハデな色使いではないのに、そこだけほの白い明るさがあり、繊細せんさいな筆使いのやわらかな羽は、今にもふるえて、くう、と鳴きそうだった。

「兄が、あの絵を選んでくれてよかった。※8夜叉やしやや幽霊ゆうれいだったら、とつくの昔に叫さけんでる。平静さを取り戻したいとき、ぼくはあの鳩のことや、きみがかなでくれる水音を思い出すんだ。静かな気持ちになれる。ありがとう。」

隣室りんしつのストーヴで暖まつた座敷に、樋を流れる雨音が響いた。

（集英社 長野まゆみ『鳩の栖』より。文章の一部を改めています）

（注）※1 軒灯Ⅱ 玄関先につける明かり。 ※2 スフレⅡ 焼き菓子。 ※3 鬼気Ⅱ 不気味で、おそろしい気配。

※4 手水鉢Ⅱ 手を洗う水をいれておく底のやや深い器。 ※5 ホーローⅡ ガラス質のうわぐすりを焼き付けた金属器。

※6 栖Ⅱ 鳥などが住みつき、卵を生んでそでてる所。 ※7 灌木Ⅱ 低い木。 ※8 夜叉Ⅱ 人を食う荒々しく残酷な鬼神。

問一 部a eのカタカナは漢字に直して、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 「※をかむ」とは「くやしさを腹立たしさをこらえる気持ち」を表す慣用句です。※に適當なことばを、ひらがなで入れなさい。

問三 ~~~~~部「しお」の意味として最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 機会 イ 結論 ウ 口実 エ 賛同

問四 ―― 部①「唐津は、樺島に綿入れをはおらせながら軽口を言った」とありますが、唐津が樺島に対してこのような態度をとるのはなぜですか。その理由が書かれている一文を本文から探し、初めの十字をぬき出しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問五 ―― 部②「樺島は、病とはもう折り合いをつけたかのように」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

Ⅰ 「病と折り合いをつける」とはどういうことですか。「樺島が」という書き出しで「病氣」という言葉を用いて、二十字以内で説明しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

Ⅱ 樺島が病と折り合いをつけていることが分かる表現を、―― 部②以降の本文から探し、五文字でぬき出しなさい。

問六 ―― 部③「樋をつたう雨音がくわいてくるように見えた」とありますが、この情景には操たちのどのような気持ちが重ねられていますか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明るい調子で話そうと努めている樺島の真意をはかりかねて、その思いをなんとかして探ろうと緊張している気持ち。
イ 明るい樺島の態度に違和感を感じながらも、それを見せまいと気づかないふりをして、とりつくろおうとする気持ち。
ウ 一人で静かな気持ちになりたいという樺島に、胸をしめつけられるような悲しみを感じ、泣きたくなるような気持ち。
エ 級友の前ではおどけてよく笑っている樺島が、一方で心の平静さを求めていることを知り、苦しみを思いやる気持ち。

問七 ―― 部④「樺島の口から名前を呼ばれる心地良さ」とありますが、この説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 樺島は人目を気にせず自分を引き立ててくれており、樺島にとって自分が特別な存在であるという優越感。
イ 樺島は他の級友と同じように自分に接してくれており、友情に付き合いの長さは関係しないという満足感。
ウ 樺島が期待をしてくれているのが分かり、自分でも人のために何か役立つことができるのだという幸福感。
エ 樺島が教室にいる時のように穏やかな調子で話しかけてくれ、自分の居場所があることを確認した安心感。

問八 ―― 部⑤「ひとりでは樺島の家へ寄りにくい。唐津への気兼ねもあった」とありますが、この時の操の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 話し下手な自分一人では樺島を楽しませる自信は全くないし、樺島をめぐって唐津とは対等な関係を保ちたいという気持ち。
イ 樺島には遠慮する気持ちがあつて余計な気遣いをさせたくないし、世話上手な唐津ぬきで訪ねるべきではないという気持ち。
ウ 樺島の病気の重さを考えると二人きりになるのが少しためらわれ、自分が唐津よりもしゃべってはいけないという気持ち。
エ 病気の辛さを忘れさせてほしい樺島の期待に応えられるかが不安で、大親友である唐津の機嫌を損ねたくないという気持ち。

問九 ―― 部⑥「少しだけ庭へ寄らしてもらってもいいですか」とありますが、これは操のどのような気持ちから出たことですか。三十字以上五十字以内で説明しなさい。（句読点や記号も一字に数えます）

問十 この文章の特徴の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえを用いて美しい風景を細やかに描き出すことで、登場人物の淡々とした思いがより強調されている。
イ 登場人物の心情を直接的に表現しないことで、心がゆれ動く様子がかえって効果的に浮かび上がっている。
ウ 静かな音と会話をたくみにからませることで、登場人物の心と心の触れあいが印象的に表現されている。
エ 複数の語り手の立場から物語を展開させることで、一人一人の登場人物の心情が細やかに描かれている。

問十一 登場人物の人物像として正しくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 操は口数は多くないが、情景や他人の行動、表情などをよく見ていて、深く考えを思いめぐらす人物として描かれている。
イ 操は人と関わるのが苦手なために、相手の言葉や表情に気持ちを左右される繊細な神経を持つ人物として描かれている。
ウ 唐津はひょうひょうとしていて、さりげない優しさで友を包み込み、場の温かい雰囲気を作り出す人物として描かれている。
エ 唐津はおおざっぱで細かいことを気にしないように見えて、その時その場にふさわしい行動をとる人物として描かれている。
オ 樺島は決して声を荒げることのない、穏やかで澄んだ心の持ち主で、静かさの中に強さも併せ持つ人物として描かれている。

得 点

問題二

d	a
e	b
	c

d	a
e	b
	c

問

問 二
A
B

問

問

問三	I
	II
	III

問

問三

[illegible][illegible]

問四

問五

II

II

問六

問六

問六

問七

問七

問七

問八

問八

問八

問九

問九

問九

ア
イ
ウ
エ
オ

問十

問十

問十一

問十一